本能寺蔵『落葉百韻』訳注（一）
付・『落葉百韻』翻刻及び解説（『落葉百韻』について）

伊藤伸江・奥田　勲

京都の古刹本能寺には、某年十月二十五日に張行された賦何人百韻（『落葉百韻』）の巻子本が蔵されている。この百韻は、本能寺の第四世日明上人が、心敬を宗匠に迎えて、心敬のみならず歌人正徹とも関係の深い、清水寺、東福寺の僧や畠山氏の被官である武士たちを連衆として行なった連歌であり、その資料的価値の高さから『連歌貴重文献集成　第四集』（昭和五五・勉誠社）に複製が収められたものである。伊藤と奥田は、在京時の心敬の連歌作品の研究をすすめるにあたり、『落葉百韻』の表現の分析が必須であると判断し、この百韻の注釈作業を共同で行ない、発表をなすこととした。それゆえ、この訳注及び翻刻・解説は、科研費基盤研究Ｃ「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」（研究代表者伊藤、研究分担者奥田）の成果である。注釈等の執筆に関しては、伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で意見交換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめた。

凡例

一、底本は本能寺蔵某年十月二十五日賦何人百韻（『落葉百韻』）である。該本は孤本であるため対校本はない。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は百韻の翻

刻に示してあり、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

一、各句には、**[式目]** **[作者]** **[語釈]** **[現代語訳]** の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し **[現代語訳]** の他に **[付合]** **[一句立]** の項目を設けた。さらに必要な場合には **[考察]** **[補説]** **[他出文献]** の項目も設けた。

※本訳注（一）の引用文献典拠一覧及び参考文献は、同時に刊行される『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集（日本文化編）第十一号（通巻一号）』掲載の「本能寺蔵『落葉百韻』訳注（二）」の末尾に掲載する。参照を願うものである。

[注釈]

（初折　表　一）

一　木の本（もとの）能寺井（ゐ）にたまる落葉哉

[式目] 冬（落葉）　水辺・体（井）　植物（木）　落葉只一、松落葉一（一座三句物）　賦物「落人」（野坂本賦物集）。

[作者] 句上に「一條大閤　御一句」とあり、作者は一条兼良。百韻の複製を載せる『連歌貴重文献集成 第四集』に

おける『落葉百韻』の解説（金子金治郎氏）は、「表紙の左側、ラベルの上に当たって、一条大閤代の文字がよめる。～これは、巻末の句揚に、「一條大閤御一句」と示す兼良の発句に関するもので、木の本能寺井にたまる落葉哉の発句が、代作であることを示している。ラベルの蔭か、左側に代作者名を記しているのであろうが、今は読めない。」と述べ、「表紙に記す程であるから、代作者は宗門中の高位の勘能、日与上人あたりかもしれない」と推定し、代作（代作者は不明）とされている。さらに金子氏は、「この懐紙（稿者注　現存巻子本に仕立てた際に落葉百韻が写された懐紙）と、前述の表紙及び見返の間には、古色の点で相違がある。表紙及び見返などの外装は、原巻子本のものを用いたのであろう。」と述べる。外装の「一条太閤代」の文字等については、今後さらなる考究の余地があろうが、今は懐紙の句上に従い、兼良の発句として取り扱う。

一条兼良は、応永九年（一四〇二）生、永享四年（一四三二）摂政・氏長者、文安三年（一四四六）太政大臣、文安四年（一四四七）関白、享徳三年（一四五三）准三宮となり、文明五年（一四七三）に出家、文明十三年（一四八一）八十歳で没。学才豊かで、伊勢物語、源氏物語の注釈などの古典学、有職故実、和歌、連歌の著作を数多く残した。和歌を冷泉持為に学び、正徹にも近しかった。

［語釈］●木の本の　「本の」とそれに続く「寺」の部分に「本能寺」を詠み入れている。掛詞にするために無理な表現をしており、類例は管見に入らない。「木の本」という語句は、桜の木の下に庵を結ぶ出家者を表現した「このもとをすみかとすればおのづからはなみる人となりぬべきかな」（詞花集・雑上・二七六・花山院）や、西行の「このもとの花にこよひはうづもれてあかぬこずゑをおもひあかさん」（山家集・落花・一二四）等によって、桜の木の下を表す春の表現として多く詠まれてきた。落葉を詠む和歌は「わび人のわきてたちよるこの本はたのむかげなくもみぢちりけり」（古今集・秋下・二九二・僧正遍昭）などわずかだが、「木本につもるとみるや山風のふかぬ絶間の落葉なるらん」（続草庵集・落葉・二七〇）「木のもとの落葉がうへに音信れて昨日の秋をとふしぐれかな」（正徹千首・初冬・五〇〇）のように、頓阿や正徹には豊富に作例が見られる。●寺井　寺の境内にわく清水、または井戸をいう。連歌

の作例としては、「くみなるゝ寺井の水のあさごとに／こほりをくだく霜のふる道」（小鴨千句第八百韻・五七／五八・心恵（敬）／専順）がある。●たまる　和歌の表現で、「たまる」ものは多くは露、霰などで、落ち葉についていうのは『為尹千首』（「一とほりたまる木の葉にしられけりかきねやこえぬ嵐なるらん」）以後か。●落葉　心敬歌「影清き寺井の水にかた枝さす桐のわか葉の風ぞ涼しき」の自注に「井梧とて井の辺にうふる木なればなり」（芝草句内岩橋下）とあるのを勘案すれば桐の落ち葉か。鎌倉中期成立の『和漢兼作集』に「籬菊紫残秋色冷　井梧紅脆雨声余」（秋下・山寺即事・八二八・土御門内大臣）、井戸に桐の葉の落ちる情景として「衰桐稿葉落寒井　老菊晩花護故籬」（冬上・初冬即時・九六六・円明寺前関白左大臣）と見られるが、和歌では、桐の若葉が涼しく茂る井戸の景は心敬の作例が早く、連歌に「むす苔深し山の井の水／涼しさは桐の若葉の木のもとに」（壁草・夏・三九一／三九二）があり、『壁草』（有注本）では「梧は井のもとにうふる木也。この井は桐のわかばと付るに候也。」と注している。『連珠合璧集』にも「桐トアラバ、おち葉、井」。肖柏も草庵の井戸の辺に桐を植え、葉の広がりに涼を得ており（『春夢草』二〇七七詞書）、和歌における井戸端の桐の落葉の作例の登場は「くむ人もみえぬ板井の水のうへに桐の葉おつる秋はきにけり」（称名院集・秋・幽棲秋来・四九七）と遅いものの、井戸と桐との近しさはこの句の鑑賞に利する。

［現代語訳］　ここ本能寺では、木の下の寺の井戸に、落葉がたまっていることよ。

［考察］　一条兼良は、当代の文化人として知られ、『新続古今集』の両序のみならず『草根集』、『竹林抄』などの家集、句集の序文を草し、連歌論書『連歌初学抄』、寄合書『連珠合璧集』も著す等和歌・連歌の碩学である。連歌では、主なところでは宝徳三年（一四五一）に『三代集作者百韻』（自邸で興行）、『以呂波百韻』に参加、文明二年（一四七〇）には伊勢国司北畠教具主催の『北畠家連歌合』に判を加えており、また『新撰菟玖波集』には二四句（内発句六句）入集している。

彼の連歌作品は奇抜な秀句仕立てが特色となっている。例えば発句「瓶に挿せ劫を尽くさむ春の花」（新撰菟玖波集・発句上・三六五三）は、「年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし」（古今集・春上・五二・

藤原良房）を念頭に置きながら「劫」と「甲」、「瓶」と「亀」、「亀甲」の縁をつくっている。また、「誘ひてはいざ桜とや夕嵐」（新撰菟玖波集・発句上・三六六三）は「いざさくら我もちりなむひとさかりありなば人にうきめ見えなむ」（古今集・春下・七七・承均）を踏まえ、「夕」に「言ふ」を掛ける。「本能」を「本の」と読みかえる、当該句までの自由さは他に管見に入らないが、彼の句に存する秀句への強い執着を見ると、この発句の掛詞の用法もうなづけるものがある。なお彼の和歌に関しても、掛詞の修辞や字余りが多い語戯性の強い異色な和歌であるとの考察がある（伊藤敬『室町時代和歌史論』）。

【補説】『雍州府志』巻八古跡門上の「柳の水」の項に「西洞院三条南に在り、元内府織田信雄公之宅の井也」（原漢文を読み下す）とし、「一説に柳の水は元本能寺之旧地、今茶屋中島氏之宅地に在り、然れども今其の井無し」とあるのはこの発句と関連あるか。なお、西洞院三条の辺に、柳水、本能寺の町名が現存する。

（初折　表　二）木の本能寺井にたまる落葉哉

二　ふりぬる庭にさゆる松風　　日明

【式目】冬（さゆる）　居所・用（庭）　庭只一、庭の教など云て一（一座二句物）　松風只一、春の風一（吹物、一座二句物）

【作者】日明。本能寺四世。康正二年（一四五六）に本能寺貫主となる。本百韻にも出座している日与（隆蓮）と共に『本妙寺本能寺両寺法度』などを定め、門流の組織化に尽力した。文明六年（一四七四）九月十一日没。本百韻では脇と挙句など五句を詠む。

【語釈】●ふりぬる庭「古りぬる宿」の表現は和歌に多いが、「庭」と結んだ例は多くない。「苔ながらふりぬる庭の小萩原朝露かけて誰にみせまし」（草根集・朝萩・一四四・応永二十六年一夜百首）が少ない例の一つ。●さゆる松風　身にしみる冷たい松風。「薄こほるうへには雪のふりためて／あられの音もさゆる松風」（看聞日記紙背応永二十六

年三月二十九日山何百韻・七／八・庭田重有／田向長資）等の用例がある。

［付合］発句の、本能寺の井戸に散りたまる落ち葉の景を受けて、葉を散らす冷たい風の吹く古びた庭を描写している。裸木の立つ冬の庭で、緑をわずかに残す松の間を、寒風が吹き過ぎていく。ここまでは実景であろうし、脇の役目から本能寺の庭の枯れさびた風情をめでていることになる。「ふりぬる」の「ふり」に落ち葉が「降る」を掛ける。

［一句立］古びた庭には、冷え冷えとした松風が吹いている。

［現代語訳］（前句　ここ本能寺の木の下の井戸には落葉がたまっていることだ。）そして、木の葉が降り落ちる古びた庭には、冷え冷えとした松風が吹いている。

（初折　表　三）ふりぬる庭にさゆる松風

三　都まで今朝は時雨るる冬のきて　　心敬

［式目］冬（冬のきて）　今朝只一、けさと云て一（一座二句物）　都只一、名所一此内に有べし、旅一（一座三句物）　時雨るる（降物）

［作者］心敬。応永十三年（一四〇六）～文明七年（一四七五）。『落葉百韻』の張行時期は、日明上人が本能寺貫首となる康正二年（一四五六）以後、寛正六年（一四六五）までの時期と推定されるが、例えば長禄四年（一四六〇、十二月二一日に寛正元年に改元）には五五歳である。宗匠として十六句出詠。

［語釈］●都まで　都までも。心敬は和歌で「都まで関の東のたび衣空にやつさでかすむ春かな」（心敬集・一〇一・関路早春）と詠み、また『心敬僧都十体和歌』には「都まで袖よしぐれよ夕日影もみぢこきいれてかへるさのやま」（山路紅葉・一六六・麗体）がある。連歌でも「春ともしらじ寒き山陰／都まで薪に残る雪を見て」（吾妻辺云捨・五九／六〇）。この句には「時雨るる」と「きて」の二つの動詞が含まれる。「都まで」がどちらにかかるかによって解

釈は変わってくる。前者なら、時雨が山や野などの地域ばかりでなく、都という空間にさえ及んでいることになり、後者なら、冬が都にやってきたということになろう。「まで」の語義の決定は容易でない場合がある。●今朝は時雨る　和歌に「きえかへりつゆもまだひぬそでのうへにけさはしぐるるそらもわりなし」（後拾遺集・恋二・七〇〇・大納言道綱母）等があるが、例が少ない表現。●冬のきて　冬がきて。「冬の始の心ナラバ、冬のきて」（連珠合璧集）。『新古今集』の祝部成茂歌「冬のきて山もあらはに木のはふり残るまつさへ峰にさびしき」に依る。この表現は、藤原光俊により「ふゆのきてしぐるる時ぞ神なびのもりのこの葉もふりはじめける」（続後撰集・冬・四五八）と「時雨」が詠み添えられ、宗尊親王歌壇や、南朝歌壇に享受され、伏見院ら京極派にも注目された。この百韻と同時期では、正広が非常によく使う。『徒然草』一四段に、成茂歌が世評と異なり、秀歌であると評されているが、『徒然草』がこの百韻の文化圏と重なる点から注意してよい。正広も「住吉の松の嵐に冬のきて時雨の声をならべてぞきく」（松下集・初冬時雨・一九一三）のように、好んで時雨と併せて詠み、当該句も同様に時雨を詠んでいる。「秋は暮れぬと時雨降るなり／同じ野の露だにかはる冬のきて」（享徳二年二月四日何人百韻・七〇／七一）、「送り迎ふる山の下庵／秋寒き嵐の末に冬の来て」（新撰菟玖波集・一〇七二／一〇七三・徳大寺実淳）。なお、本百韻第八一句（伝芳）に「春のきて」がある。

【付合】前句の「さゆる松風」に「時雨」を付けた。「時雨トアラバ、松風」（連珠合璧集）。時雨と松風の取り合わせは伝統的な和歌表現だが、根源には「いまは又ちらでもまがふ時雨かなひとりふり行く庭の松風」（新古今集・冬・五八七・源具親）の世界があり、ここでは発句・脇・第三にかけてこの歌を念頭に置いていることになる。「さゆる」は「冬のきてとほ山おろしさえゆけばやくすみがまのけぶりたつみゆ」（新撰和歌六帖・五八六・衣笠家良）のような、寒風の到来。

［一句立］都までも今朝は時雨が降る、そんな寒い冬がやってきて。

［現代語訳］（前句　長い年月がたった庭には身にしみとおる冷たい松風が吹いている。）山ばかりでなく都までも

今朝は時雨が降る、そんな寒い冬がめぐってきて。

（初折　表　四）都まで今朝は時雨るる冬のきて

四　昨日の雲と秋や行くらん　　三位

［式目］冬（秋や行くらん）　雲（聳物、可隔三句物）　昨日（一座一句物・可嫌打越物）

［作者］半井明茂。応永九年（一四〇二）生、文明十五年（一四八三）七月六日没（八二歳）。初名は茂成で、明茂と改名している。堯孝の『慕風愚吟集』によれば、例えば応永二十八年（一四二一）に、堯孝は彼の家の月次三首歌会にしばしば出席しており、明茂は若年より和歌の学習に熱心で堯孝と親交があり、正徹とも顔を合わせていた。そうした交友関係の縁から、心敬を師匠とするこの百韻にも参加したか。『公卿補任』によれば、宝徳三年（一四五一）従三位、享徳三年（一四五四）正三位、応仁元年（一四六七）には従二位に叙せられ、応仁二年（一四六八）に出家した。前甲斐守明茂朝臣として宝徳二年の『後崇光院仙洞歌合』等に出詠している。この百韻では兼良を除けば最も身分が高く、七句を詠んでいる。

［語釈］●昨日の雲と　昨日空にたれこめていた雲のようにあとかたもなく。「昨日の雲」はとらえられないはかないものの象徴。「しぐれにまじるあとの山風／人の身は昨日の雲のはかなくて」（因幡千句第三百韻・四八／四九・紹永／青陽）。「おもひいでよたがかねごとのすゑならむきのふの雲の跡の山かぜ」（新古今集・恋四・一二九四・藤原家隆）を本歌として、心敬は「思ふもむなしかねごとの末」に「契りより昨日の雲は跡みえて」（竹林抄・恋上・七〇七）と付け、それほど消えやすい雲よりもまだあてにならないあの人の言葉と強調している。●秋や行くらん　秋が過ぎて行くのだろうか。「嵐吹嶺の庵りの戸を閉て／見ざりし雲に秋や行らん」（河越千句第五百韻・七／八・道真／満助）。

【付合】「今朝」と「昨日」、「きて」と「行くらん」が相対している。昨日までの秋の気配は、まるで雲がちりぢりになるかのように跡形も無く消え失せ、今朝は都まで冷えるほどの寒さの冬となった様。秋の終わりの昨日の雲は消え、冬のはじめの今朝には、時雨を降らせる寒い冬の雲が新たにたれこめた。

【一句立】昨日の空の雲がはかなく散り失せるように、秋も行き過ぎていくのだろうか。

【現代語訳】（前句　今朝は都までも時雨が降る、そんな寒い冬が到来していて。）昨日まで残っていた秋の気配は、昨日の雲が流れ去り消えて行ったように、なくなってしまったのだろう。

（初折　表　五）昨日の雲と秋や行くらん

五　旅枕見なれし月をしたふ夜に　隆蓮

【式目】秋（月）　旅（旅枕）　夜（夜分）　月只一、恋一、月松などに一（月与月　七句可隔物）

【作者】隆蓮。本能寺六世権大僧都日与。応永三十三年（一四二六）出生、延徳三年（一四九一）没。寛正六年（一四六五）本興寺に入山、文明六年（一四七四）には本能寺に入山して、両山を兼務した。「博学多才」な「両山中興」と称された（『両山歴譜（日唱本）』）人物であった。和歌や連歌をよくし、『新撰菟玖波集』に十二句入集。この百韻の兼良の発句に日与の句のみで九十九句を付けた『法華要文連歌』を詠んでいる。その他『文明九年正月二十二日何船百韻』に宗祇、利在、立承らと参加、延徳二年（一四九〇）閏八月には、本能寺の自坊で、宗祇らと『連歌七人付句判詞』を競作している。

【語釈】●旅枕　旅に出てふだんの床でない寝床に旅寝すること。「ならはずよいづくの月ぞ旅枕／都出ればみしあきもなし」（河越千句第一百韻・五／六・印孝／長敏）。●みなれし月　見慣れた月。このイメージはしばしば詠まれるが、「見なれし月」の言い回しは管見の限りでは、「五十まで見なれし月のかげのみやうきをわすれぬ友となるらん」

（延文百首・月・五四八・法守法親王）の一首しかない。ただ、「都にて見なれしかげはかはらねどしらぬ山路を出づる月かげ」（嘉元百首・旅・一二八四・実覚）がこの句の情景理解に役立とう。連歌においても、「見なれし月」の用例は見あたらないが、「おもひやる宮この月にまくらして／秋のあはれは旅やまさらむ」（表佐千句第八百韻・一七／一八・承世／紹永）が読解の参考になる。●したふ夜に　恋しく思う夜に。この言い回しも同様で、「かたぶけばみるだに月をしたふ夜にあらましかばの人ぞ古にし」（孝範集・独惜月・六七）など和歌でも希少な用語。

【付合】秋の終わりの夜の空のさまを、旅泊にて見上げている様にとりなした。

【一句立】旅寝して、都で見慣れた月を恋しく思う夜に。

【現代語訳】（前句　昨日の空にあった雲が散りうせたように、秋も又過ぎ去って行くのだろうか。）長い旅を続けてきて、都で見た月の光を恋しく思いつつ、雲なき空にかかる月を見ている旅寝の夜のうちに。

（初折　表　六）旅枕見なれし月をしたふ夜に

六　いづくの空ぞ鴈の鳴く聲　毘親

【式目】秋（鴈）　空空だのめなど云ては此外也（一座四句物）　聲（可嫌打越物（音声に響））　鴈（動物）

【作者】毘親。『顕伝明名録』には「伊丹左衛門尉」とあり、伊丹の領主摂津氏の一族か（井上宗雄氏推定）。正徹一門及び彼らと親しい歌人たちによる『康正三年九月七日武家歌合』にも心敬、正頼、円秀らと参加しており、尊経閣文庫蔵六冊本『草根集』巻十五の正広の奥書に藤原毘親の名が見え、正広との親しさもわかる。

【語釈】●いづくの空ぞ　どちらの空からなのか。「月きよみ羽うちかはしとぶ雁のこゑ哀なる秋風の空」（拾遺愚草・花月百首・六八四）のように、清明な月の光と、雁の声を秋の景物として組み合わせた歌は多いが、「いづく」と雁の鳴き声と結んだこの言い回しは和歌・連歌に例が少ない。「とほざかる声ばかりして夕ぐれの雲のいづくに雁のなくら

ん」（続拾遺集・暮天聞雁・二六八・亀山院）、「霧にくれては山もしられず／鳴鴈はいづくの空をわたるらん」（紫野千句第九百韻・六／七・禅厳／春松丸）のように、雲や霧に隔てられて姿が見えない様を思わせる。●鴈の鳴く聲　管見では、和歌には「朝霧のよぶかき空に立ちかへり又ややどりを雁の鳴く声」（柏玉集・初雁・七三六）のみ。連歌では「雲ゐのいづく雁の鳴声／深き夜の月は西なる影澄て」（竹林抄・秋・四六三・専順）など。

【付合】前句の「月」に「鴈の声」を付けた。都をなつかしむ思いからも「雁」は呼びおこされる景物である。「雁トアラバ、都」（連珠合璧集）。

【一句立】鴈の鳴く声はどちらの空から聞こえてくるのだろう。

【現代語訳】（前句　都で見慣れた月を旅の空に恋しく思い、都のことを慕わしく感じている夜には、）空のどちらからなのだろうか、雁の鳴く悲しげな声が聞こえてくる。

（初折　表　七）いづくの空ぞ鴈のなく聲

七　夕暮は色づく山もかすかにて　利在

【式目】秋（色づく）　夕暮（一座一句物）　山（山類）　山与山（可隔五句物）

【作者】利在。『宝徳四年千句』『文明九年正月二十二日何船百韻』に出座している。

【語釈】●色づく山　紅葉した秋山の様。「けさきなくかりがねさむみ露ちりていろづく山に秋風ぞふく」（雅有集・三二六・秋）。「色づく山ぞ詠やらるゝ／〳〵松立てる高嶺の月のくらき夜に」（行助句・一〇六九／一〇七〇）。『連珠合璧集』に「秋の心、色付〈稍　野山　あさぢ　草〉」とある。なお、山と山は可隔五句物であり、この百韻ではそれに従い初折裏十三句目に「奥山」が詠まれる。●かすかにて　「色づく山も」とあるところから、「鴈のなく聲」がかすかであるばかりか、山の色もかすかにしか見えないと、音と色とを重ねて表現していることになる。「かすかにて」がこの

ように使われた例は他に管見に入らない。「玉まつる野の哀なる色／夕昏は松のともし火幽にて」（行助連歌・二二六一／二二六二）。

［付合］「鴈」に「山」をつけ、「聲」に「色」を対する。『連珠合璧集』で「山トアラバ、嶺とも谷とも山類のよりきたれるを付べし。又植物には松櫻、生類には鳥鹿などよし。詞には、たかき・へだつる・こゆるなど付べし」と指示があり、前句の「鴈」とのつながりがわかる。

［一句立］夕暮れ時には、紅葉に色づいた山も、太陽の光が失われると共にかすかに見えるばかりになっていって。

［現代語訳］（前句　どこの空を雁は鳴き渡っているのだろう。）夕暮れ時には、（どこともわからず聞こえてくる鴈の声がかすかにしか聞こえないだけでなく、）紅葉した山もかすかにしか見えなくなってしまって。

（初折　表　八）夕暮は色づく山もかすかにて

八　霧降る野路の末のはるけさ　円秀

［式目］秋（霧）　霧（聳物・可隔三句物）

［作者］円秀。正徹の友人として『草根集』に頻出する僧。『草根集』（日次本）に、「清水寺平等坊権少僧都円秀」（康正元年正月二十六日条）とある。正徹は享徳から康正、長禄年間にかけて、円秀の月次歌会に定期的に出ていた。『康正三年九月七日武家歌合』に参加。

［語釈］●霧降る野路　霧がたれこめている野中の道。「霧降る」は、正徹、正広、心敬らが「霧降る野辺」「霧降る谷」などといった表現で和歌に使用し、『康正三年九月七日武家歌合』では忠英も詠んでおり、この連歌の連衆にとっては親しみ深い表現であった。連歌にも用例は多い。例えば、「芝生がくれの秋の沢水／夕まぐれ霧ふる月に鳴鳴きて」（文安四年八月十九日賦何人百韻・二／三・心恵（敬）／専順）では、夕暮れ時に霧がたれこめ、夕月がうかぶ様

子を詠む。聳物同士は可隔三句物であるが、四に「雲」があり、規則に適合する。「霧トアラバ、秋霧　うす霧　朝霧　夕霧　夜霧など云へり」（連珠合璧集）。●末のはるけさ　路がはるかに続き、先の方は遠く隔たっていること。「霜をく野べの末のはるけさ／かり残す道はをざゝの枯立て」（飯盛千句第九百韻・一四／一五・快玉／仍景）。

［付合］「色づく」に「霧」、「山」に「野路」をつけた。暗くなってきているのに加え、霧がたれこめてきた、夕暮時の薄暗さを表現した。前句で表現した山の様子に、前方へ続く路を加え、視線が新しい動きをなすようにしている。

［一句立］霧がたれこめている野中の路の先ははるか遠くに続いている。

［現代語訳］（前句　夕暮れ時には、紅葉した山もかすかにしか見えなくて。）　霧がたれこめている野路の先ははるかに遠く続いている。

（初折　裏　一）霧降る野路の末のはるけさ

九　かきくらす雪にや里もかすむらん　有実

［式目］春（かすむ）　雪（降物・一座四句物）　里（居所・体）　居所与居所（可隔三句物）

［作者］有実（未詳）。

［語釈］●かきくらす　空を暗くして降る。「かきくらす雪野にむすぶ草もがな」（芝草句内発句・三九六）。●雪　ここは春の雪。『連歌新式』一座四句物の項には「雪　三用之、此外春雪一似物の雪別段の事也」とある。●かすむらむ　降る雪により視界がさえぎられているからなのか、霞んでいるようである。雪にあたりが霞む歌例は「ながむれば春ならねども霞みけり雪おろふれる遠きのの里」（後鳥羽院御集・冬・六六）。ここは冴え返るごく早春の景。「立ちかへり又きさらぎの空さえてあまぎる雪にかすむ山のは」（新拾遺集・春上・四七・京極為兼）。

［付合］付句は路の先の遠方の光景。路をたどりゆけばはるか先に里があり、遠方ゆえにはっきりとは見えない様

を、雪故に霞んだかとした。見えにくさを「かすむ」と表現することで、この句まで四句続いた秋から、春へと季を転換している。

［一句立］あたりは降る雪のために暗くなり、その雪で里も霞んでみえているのだろうか。

［現代語訳］（前句　霧がたれこめる野路の先は、はるかに遠く里へと続き、）そのあたりは、空を暗くして降る雪によってなのか、かすんでいるように見えているのだ。

（初折　裏　二）かきくらす雪にや里もかすむらむ

一〇　まだ初春は梅が香もなし　忠英

［式目］春（初春）　梅只一、紅梅一、冬木一、青梅一、紅葉一（植物・一座五句物）　はなし上句下句各一　もなし同前（「もなし」は新式今案までは式目に入らないが、『連歌新式追加並新式今案等』で一座二句物となる。）

［作者］忠英。「正徹弟子、若州住人、井上能登守」（『頭伝明名録』）とある人物か。畠山氏の被官で、井上統英の父、総英の祖父である忠英と考える説もある（米原正義『戦国武士と文芸の研究』）。この人物とすると、「若州住人」は「能州住人」であり、おそらく文安年間（一四四四～一四四八）に催行された、能登守護畠山氏の一族、畠山義忠（法名賢良）の高野山参詣和歌にもその名が見える（『賢良高野山参詣路次和歌』に正徹、心恵（敬）、正広らと共に出詠）。『康正三年九月七日武家歌合』にも参加。

［語釈］●梅が香　『連珠合璧集』に「春の始の心ナラバ、霞そめたる　残雪〈雪消て　雪間〉初春」、「梅トアラバ、雪」。「はるまださえてうめがかもなし／かすまずはなにをなにはのあさぼらけ」（基佐集（静嘉堂文庫本）・一九／二〇）。●もなし　専順作『かたはし』は、「はなし」という表現と比較し、より柔らかな耳ざわりを持つ表現であるとして、「もなしと云句は、彼も是もといふ心ならでも、ただ詞の和らぎに、もといふべしと堯孝法印申されき。」と二

条派和歌の知識を学んで述べている。ここは専順の言うやわらぎを与える「もなし」であろう。なお、「もなし」という表現は、とりわけ心敬の句に多く見られ、「否定的表現の様式をとつてゐても、実は虚無ではなく、むしろ積極的に感動の強さを示す手法」（荒木良雄『心敬』）と注目された。他にも、山根清隆氏（『心敬の表現論』）、湯浅清氏（『心敬の研究』）らの論がある。

［付合］前句の「雪」に「梅」を付けた。

［一句立］春の初めの今はまだ、梅の香りもしない。

［現代語訳］（前句　空を暗くして降る雪によってなのか、里もかすんでいるよう。）　かすんで見えてはいても、春の初めの今はまだ、梅の香りもしない。

（初折　裏　三）まだ初春は梅が香もなし

一一　年寒きこずゑの花の咲きやらで　貞興

［式目］花（春）

［作者］貞興（未詳）。

［語釈］●年寒き　年の寒い頃。漢語「歳寒」の訓読から生じた語。「歳寒、然後知松柏之後彫也」（論語・子罕第九）とある表現から、「年さむき松の心もあらはれて花さくいろを見する雪かな」（新勅撰集・山野雪朝・四〇九・九条道家）、「年さむき松の色にぞつかへては二ごころなき人もしられん」（寛正百首・歳暮・七〇・心敬）と、厳寒に耐える松の変わりなさを和歌に詠まれた。ここは梅の情景。松・竹・梅を「歳寒三友」、梅を竹や寒菊と共に「歳寒二友」「歳寒二雅」とする故事から、梅の情景にも用いられる。「年さむき松をばいはじ霜雪の先あらはるるむめの一花」（柏玉集・冬・年内早梅・一二三六）。●花　一句としては桜であるが、付合では、前句から梅の花となる。●咲きや

らで　充分に開かないで。満開とならないで。

［付合］前句の「梅」から「花」をつけ、梅の花がまだ開かない様子を説明した。「年寒き」の時期であるが、前句から、年があらたまって初春になっても寒いことをさすことになる。「はるかにまよふ松のはるかぜ／こえてだにまだ年さむき柴の戸に／雪をいたゞくしづがあはれさ」（葉守千句第十百韻・六四／六五／六六・肖柏／宗般／宗祇）。

［一句立］厳寒の頃は梢の花もまだ充分に咲ききらないで。

［現代語訳］（前句　この初春はまだ梅の香りもしない。）年が明けても寒さの厳しい時期、梢の梅の花は充分に咲ききらないでいて。

（初折　裏　四）年寒きこずゑの花のさきやらで

一二　嵐ふく日は鳥も音せず　伝芳

［式目］雑　嵐（一座一句物・吹物）　鳥只一　春一　水鳥、村鳥等之間一、浮寝鳥、夜鳥等は各別物也（動物・一座四句物）

［作者］伝芳。生没年未詳。後に紹芳と称した。『顕伝明名録』によれば、「正徹門弟」であり、東福寺の禅僧であったらしい。和歌では『康正三年九月七日武家歌合』に出詠しており、連歌では、『文安四年五月二十九日何船百韻』で執筆をつとめた。また自撰句集に、専順と心敬の合点が加えられ、心敬の注も付された『紹芳連歌』がある。

［語釈］●嵐ふく日は　嵐が吹く日には。ここは前句からは、春の強風の日となる。「世は春の霞の衣きる人も嵐ふく日やぬぎにかる（類題本「ぬぎわかる」）らん」（草根集・霞春衣・七五八〇・享徳元年六月十二日詠）。「嵐吹く日」は連歌にも用例が見当たらないが、例歌は、享徳元年（一四五二）六月十二日に、正徹が清水寺平等坊の円秀のもとで月次歌会に列した際の作であり、表現の参考になる。●鳥　『連珠合璧集』に「鳥トアラバ、鳥はもろ〳〵の鳥也。又庭鳥をも鳥といふ。句によりて（かはるべき也）。」と説明される。また「鳥トアラバ、花」。

【付合】前句の「花」に「鳥」を対する。桜の花がなかなか開かない様子に、風が強く鳥もさえずりださない様を並列させて付けた。

【一句立】嵐が吹く日には、鳥も声をたてない。

【現代語訳】（前句　寒い頃には、梢の花も十分には開かない。）嵐が吹く日には鳥もさえずることがない。

（初折　裏　五）嵐ふく日は鳥も音せず

一三　奥山やあふ人さへにまれならむ　承成

【式目】雑　奥山（山類・山与山（可隔五句物））（参考「奥山　一也。又山の奥と有べし。」（『産衣』））　人（人倫）

【作者】承成（未詳）。

【語釈】●奥山や：「おく山の谷のしばはしまれにだにあふ人なしにこひや渡らん」（永享百首・寄橋恋・七八一・一条兼良）と同趣の句。影響下にあるか。→一四句【付合】。●あふ人さへにまれならむ　ましてや行き会う人までもまれであろう。「さへに」は添加を表し、「加えて～までが」の意。事態、事物をより強調して明示する働きがあり、ここは、鳥が音もしないのに加え、行き会う人までもめったにおらず、ひどく寂しいと、奥山の様を表す。「この頃はいづち行くらん山にすむ山人さへに春をしたひて」（堯孝法印集・山家暮春・一二一）。「まれならん」は、和歌では「うき時としる人さへやまれならんくだり行世の秋の夕暮」（草根集・秋夕・九四八一・康正二年七月七日詠）等で「さへ～まれならむ」と正徹が使っているが、用例に乏しい。

【付合】前句の「嵐」に「（奥）山」を付けた。「嵐トアラバ、山」（連珠合璧集）。

【考察】一一、一二、一三と花もなく、鳥も鳴かず、人もいないと進んでおり、情景の中の事物を捨象する形で句が付けられて行く。花に加え鳥「も」おらず、鳥のみならず人「さへに」まれだと、欠落の状態が激しくなる様を表す

ために、助詞も注意深く選ばれている。

［一句立］奥深い山の中となると、行き会う人までもめったにいないのだろう。

［現代語訳］（前句　嵐が吹く日には鳥の声もまれにしか聞こえない。）そんな奥深い山の中となると、鳥の気配もめったにせず、まして行き会う人などは、ごくまれにしかいないのであろう。

（初折　裏　六）奥山やあふ人さへにまれならむ

一四　うきをたつきに世を捨つる道　　立承

［式目］雑・述懐（うき）　世只二浮世ゝ中の間に一、恋世一　前世後世などに一（一座五句物）　捨世、捨身等捨字（可嫌同懐紙物）

［作者］立承。和歌では、能登七尾にて行なわれた、畠山義統・義元父子主催『文明十三年三月十八日歌合』（正徹弟子正広判）に出詠、連歌は『文明九年正月二十二日何船百韻』に宗祇、隆蓮、利在らと参加、畠山義統張行の『文明十五年十一月二日何船百韻』にも出詠している。おそらく畠山氏の被官であろう。

［語釈］●たつき　「たつぎ」とも。『日葡辞書』は「Tatçugui タツギ」と「Tatçuqi タツキ」を項目にあげ、「むしろTatçuqi（たつき）と言う方がまさる」と注する。意味は、あることをするのによい機会。ついで。「説経などして世渡るたつきともせよ」（『徒然草』一八八段）と使用されるように、「たつき」は世を渡る手段などに用いられる語だが、出家の機縁の意の用例は管見に入らない。恋の句に用いられた用例としては、「たつきなき夕べを空にうちわびて／さはりをだにもきかばうからじ」（大永年間何路百韻・二五／二六）等があり、それゆえこの句の「世」は、式目上は只の「世」であるが、恋の世の意味をも背後に響かせており、その縁で「たつき」を用いているのであろう。なお、百韻中には、「世」の用例は、他に名残折表五句目に「世の中」が存するのみである。●世を捨つる　出家する。「世

トアラバ、すつる」「捨身トアラバ、山」（連珠合璧集）。前句の「奥山」から、「世を捨つる」と付けた。述懐は、懐旧・無常も含んで三句まで連続する。

［付合］ 表面上は、「奥山」から「世を捨つる」と付くが、前句の「あふ」に恋の雰囲気がある。「あふときばかりうきこともなし／暁の別れをしたひ待ち暮れて」（紫野千句第二百韻・七〇／七一）、「あふ事まれに成やうき中／同世のいのち計はよしなきに」（看聞日記紙背応永三十二年六月二十五日賦何人連歌・八四／八五・梵祐／綾小路前宰相）等が参考になる。

［一句立］ つらいと思う気持ちをきっかけとして、足を踏み入れる出家への道。

［現代語訳］（前句　奥深い山に入れば、行き会う人さえもまれであろうが、私はつらい恋の山路の奥でひどく迷ってしまっていて、あの人に会えることさえ、もはやまずないのだろう。）そんなつらい思いが先立つあまり、あの人との仲を思い切り、世を捨てて踏み入る出家への道であることよ。

『落葉百韻』翻刻

［初折表］

十月廿五日

賦何人連歌

木の本能寺井　　日明
にたまる落葉哉　　三位
ふりぬる庭に　　隆蓮

さゆる松風　　いつくの空そ
都まて今朝は　　鴈のなく聲　　毘親
時雨丶冬のきて　心敬　　夕暮は色つく
昨日のくもと　　山もかすかにて　利在
秋や行らん　　きりふる野路の
旅枕見なれし　　すゑのはるけさ　円秀
月をしたふ夜に　隆蓮

［初折裏］

かきくらす雪にや
里もかすむらむ　有実

またはつ春は
むめかゝもなし　忠英

年寒きこすゑの
花のさきやらて　貞興

あらしふく日は
鳥もをとせす　伝芳

おく山やあふ人
さへにまれならむ承成

うきをたつきに
世をすつる道　立承

あらましにさそはれ
そむる墨の袖　正頼

ゆふへの鐘の
なみたとふ聲　心敬

暁に月のなる
まて猶まちて　利在

たかきぬ〳〵の
秋うらむらむ　隆蓮

むしたにも思ひある
夜に鳴よはり　三位

むくらのやとに
たへてすむ比　円秀

むかしのみたかき
蓬にへたゝりて　伝芳

霜の色そふ
かみのあはれさ　毘親

［二折表（→本来二折裏）］

いにしへを忘れぬ
山のよるの雨　心敬

松ふくかせも
かすみはてけり　立承

散花のにほひを
春のなこりにて　日明

たちわかれゆく
かりの一こゑ　貞興

羽をかはす鳥の
契もある物を　三位

おもひをつけん
まほろしもかな　隆蓮

来ぬ人やこゝろ
つかひにかはるらむ　有実

なくさむ月を
たれかうらむる　毘親

秋の夜の老の
ね覚に時雨して　利在

いのちの露の
いつかこほれん　心敬

狩のこす草葉
はかりの陰なれや伝芳

夏のゝはらの
水のたえ〳〵　立承

あつき日は汗も
袖をやつたふらん忠英

やすきかたなき
そはのかけはし　貞興